

白氏文集 十九 杜陵叟・上

加藤淳平

これより二篇の、典型的なる新樂府の諷諭詩を紹介せむ。一は『杜陵叟』なり。杜陵とは、長安に近き南郊の地にして、詩はこの地の老農夫の、詩人が實際に體驗せる早魃の年の困苦を詠ふ。この頃樂天、皇帝側近に侍し、皇帝は中唐の名君、憲宗なりき。若き、才能豊かなる少壯官僚として、皇帝にも、近臣にも鍾愛せられけむ。樂天一生の、最も良き時期と言ひつべし。新樂府のみならず、彼の人口に膾炙せる『長恨歌』もこの時代の作なり。白樂天の生きたる中唐は、則天武后の地主貴族を排し、科擧官僚を登用したるにより、樂天が如き、貧しき階層出身者、地主貴族と抗争しつつ、烈々たる正義感に基づき、政治に従事・獻身したる時代なり。漢土にありては、「詩は志なり」とす。農民と女工の勞苦を詠ふ二篇の諷諭詩にこそ、白樂天が志を見るを得め。

杜陵叟・上

杜陵の叟おきな・上

傷農夫之困也

農夫の困くるしみを傷いたむ也

杜陵叟 杜陵叟

杜陵の叟 杜陵の叟

歲種薄田一頃餘

歲としどしに種うう 薄田一頃の餘

三月無雨旱風起

三月雨無く 旱風起こり

麥苗不秀多黃死

麥苗秀すでず 多く黃死す

九月降霜秋早寒

九月霜降りて 秋早く寒く

禾穗未熟皆青乾

禾穗未だ熟せずして 皆青乾す

長吏明知不申破

長吏は明らかに知るも 申破せず

急斂暴徵求考課

急おそぎ斂おとめ暴徵して 考課を求む

典桑賣地納官租

桑を典し地を賣りて 官租を納む

明年衣食將何如

明年の衣食 將まさにいかんせん

剝我身上帛

我が身上はくの帛はくを剝はぎ

奪我口中粟

我が口中の粟あわを奪はふ

虐人害物即豺狼

人を虐げ物を害するは 即ち豺狼

何必鈎爪鋸牙食人肉

何ぞ必ずしも鈎爪鋸牙のもののみ 人肉を食するや

(大意) 杜陵の爺さんよ、杜陵の爺さんよ。毎年やせた土地三町歩ばかりに種を蒔く。今年は三月(新曆四月)に雨が降らず、日照りの風が吹いた。麥の苗に穂が出ず、多くの苗が黄ばんで枯れてしまひ、九月(新曆十月)になるともう霜が降りて、まだ青いまま干からびた。地方の長官はそのことをよく知って居るものの、上にはありのままを報告せず、納税を急せきたて、強引に税を徴收して、上への點稼てんけぎをする。今年は桑の木を擔保に入れたり、土地を賣つたりして、何とか税金を拂つたが、來年の衣食は果してどうなるだらう。人は自分が着てゐる着物を剝はぎ、口にしてゐる食べ物を奪はふのだ。人をいぢめて人の物を壞すのは、豺やまや狼いぬのすることではないか。必ず鋭い爪や牙を持った猛獸だけが、人肉を食らふのだと、どうして云へるだらうか。

(平成二十九年七月六日受附)